

第1分科会 16:00～ 会場：月岡ホテル

テーマ「街道と上ノ山温泉」



パネラー 齋藤 光 氏（上山市立図書館長）
高瀬 陽吉 氏（上山市文化財専門員）
富士 重人 氏（かみのやま温泉旅館組合長）
コーディネーター 村松 真 氏（山形大学准教授・羽州街道交流会 幹事）



今日のテーマは、「街道と上ノ山温泉」ということになります。
3人のパネラーの方は、郷土の歴史に詳しい方々ばかりですね。
私は、専門が「地域計画」という分野で、そもそも歴史というのは得意ではないのですが、農業、林業、漁業、商業、さまざまな社会制度等をひっくるめて、私の学問は「地域計画学」でして、広く浅くなんでも扱わなければならない学問です。

村松 真 氏 最初は各パネラーの方に、それぞれ 10 分ずつお話をいただきたいと思います。まず最初のテーマが「街道と温泉」ということでご発言いただきたいと思います。それぞれお話が終わりましたら、補足的なご発言をいただきます。それから会場の方々からご質問をいただきたく思います。最後に羽州街道をどのように残していくかをお話いただきたく、上山の発展はどのようにしていったらいいか等のお話もいただければと思います。それでは最初に齋藤先生お願いします。



齋藤 光 氏

上山市立図書館の館長の齋藤です。私は上山市の町中に住んでいますけれども、元々は先祖代々檜下です。番所役人の子孫です。

いつのころからか高校か大学のあるときに、檜下の歴史に興味をもち、歴史に詳しい方に聞いたりしていました。その後教員となって内地留学ということで、3ヶ月間、檜下の古い民家を訪ね歩きました。そして、今まで見つからなかった古文書が出てきました。例えば宝暦8年の村絵図や助郷帳であるとか、宗門人別帳とかそういったものが出てきました。昭和51年でした。檜下は街道の宿場町でしたので、裕福な場面のイメージですが、いろいろ調べてみると決してそうではない。宿場町を「宿駅」といいますが、宿駅とは何なのか、その宿駅の機能についてまずお話をします。二つ目は、羽州街道は58宿ありますね。山形県内に17の宿駅があります。なんで檜下宿が注目を浴びているのか、「助郷」というのは何なのか。最初に宿駅の機能ですが、土地と土地を結び、都から地方への伝達機能として、公用役人、一般の人々の往来、荷物の運搬などで必要だったわけです。宿駅の機能は大きく2つあります。一つは幕府の公用役人が、大名等が休んだり泊まった（休泊）するため。二つ目は、幕府の公用役人が大名の荷物を積みたてて運ぶ、リレー式に運ぶということ。寛永12年に参勤交代が始まったことで、宿駅は大名が休泊する本陣、脇本陣。もちろん三山参りの行者や一般の人のための旅籠です。もう一方、荷物を運ぶという「問屋」というところが必要になったわけです。役人や大名の荷物を運ぶための役所から任ぜられている仕事が「問屋」です。年寄り役、帳づけ、馬指し、あるいは、人足指し、という役目がありました。そこで荷物の手配をしていました。次の宿駅までの馬や人足を準備するということですが、後になって大きな課題が生じてくるということになります。二つ目は、なぜ檜下宿が集録されているのか、いろいろ理由があります。難所「金山峠」が控えているために、大名や一般の通行人は、必ず檜下宿に休んだり泊まることになった。それから出羽の国に入って最初の宿駅だということもあります。二つ目は、檜下は他と違い「コの字型」になっていたこと。これはどういうことなのか。治安上意図的に作られた宿駅ではないのかなど。三つ目は道路、家等が昔と変わらない。江戸時代の家のままだに現存しているのが多く、昔を語っている。四つ目は、多くの屋号があるということ。「ひがしや」「みかわや」「くすりや」さんとかそういう屋号で現在も呼びあっているということ。五つ目は、非常に小さな宿駅であったこと。だいたい天保年間今から170年前ぐらいですか、60軒から90軒の宿であった。因みに上山は451軒ありました。天童は427軒あったということでした。というように少ない軒数で宿駅の役目を務めていた。六つ目は、明治17年につくられた、「めがね橋」「新橋」ですね。15年に造られた「のぞき橋」というものもあります。それが現在も残っていて生活橋として使われています。それで、昔は借金を返済するために、橋銭を取ってその返済に充てた云々。要するに、檜下宿は、今も昔の面影を残している貴重な宿場なんです。平成7年に金山峠越えと檜下宿は国の指定を受けているんです。ここしかないんです。

「助郷」についてなんですが、助郷に行くためには、荷物の積み立て方があるんですね。荷物を運ぶには運賃がかかるんです。その運賃の払い方が三つあり、一つは、無賃積立。無料で積立なければいけないという。これは御朱印荷物とか御証文荷物とかいう荷物です。御朱印荷物とは、将軍の朱印状があれば無賃で積み立てることが出来る。御証文荷物は、幕府の役人の証文書を発行してもらえば、無賃で積み立てることが出来るというものです。二つ目は、「お定め賃銭」。定められた賃銭によって、次の駅に積み立てるといふもの。例えば一般旅行者、公用旅行者、参勤交代の大名などもお定め賃銭というふうになっています。三つ目が、相対賃銭によって積み立てる。お互いに相談し合って積み立てるといふ荷物で、だいたいお定め賃船銭の3割増し又は2倍ぐらいになるということです。だから宿駅とすれば、この相対賃銭がいっぱいいくと儲かるわけですね。無賃積立がいっぱい来たって、無料ですから、非常に困るわけです。こういったことが幕末になってくるといろいろ問題になってくる。特に宿屋には必ず宿かけ陣場、上下陣場というものを設けておかなければいけなかった。その上下陣場という積み立てておく陣場が問題になっています。慶長6年に幕府は一日馬を36匹提供するようにそして街道を造ったりしていますけれども、慶長7年、奥州道中にもこのフテンマ制度が布かれまして、常備する人馬総数を定めたわけです。東海道の主な宿には常に100人100匹を置きなさい。あるいは、中山道とか美濃路には50人50匹とかそういうふうに決められていたのです。奥州街道については、25人25匹だと。だから羽州街道ですから、桑折から分かれて油川までですから、羽州街道は奥州街道に習って25人25匹を常備しておかなければいけなかったということです。調べてみますとこれは時代によって随分違います。例えば元禄10年では50人50匹であるとか、上山に三つの宿駅があるんですが、上山宿は50人50匹。檜下宿は25人25匹。中山宿は10人5匹だと。天保になってくと、上山宿は人足25人だと、檜下宿は人足10人で馬の決めはないんだと。どんどん変わってきます。それで足りない部分を、他の近辺の村にお願いをして、人足と馬をだしてもらい、それが「助郷」というものなのです。だから「助郷」と「宿駅」との間には常に利害関係があるし、幕末になってからいろいろと紛争が絶えないということになります。そのうち馬を飼わなくなった農家が出てくるということで、飯盛女を一人置く代わりに、馬を一匹買うなんていうことが、飯盛女馬代金制度なんていうことが出てきたのです。このことについては時間がありませんので、この辺にいたします。

【村松 氏】 どうもありがとうございます。いま館長から、当時の街道の役割、それから、なぜ檜下宿が注目されるのか、それから「助郷」について語っていただきました。温泉について富士さんの方からお願いいたします。



富士 重人 氏

はい、かみのやま温泉といっても、湯町が開湯したのが 1458 年とされていますが、本当なのか分かっていません。ただ、この温泉が 555 年以上あるのは確かです。月秀上人がこの上山にきて温泉を見つけたとなっていますが、歴史文献を見てもいろんな意見がありまして、500 年祭の時にこういうふうにしたのではないかと思います。かみのやま温泉旅館組合としても今旅館が 21 軒しかない

ところなので、同じ想いを共有したいので、組合長として皆様に歴史的なことをお話したいと思います。

1458 年に温泉が発見されてから、1535 年に、「伊達家」から上山を奪還する「最上家」の間までに、実際に上山に温泉宿が存在したのは 8 軒だけです。その間に「湯の小道」というのがあったといわれますが、いろいろ文献を見てもそれが本当かどうかわかりません。上山の大発展につながるのは、1622 年の「最上家」の崩壊です。この崩壊によって上山から最上家がいなくなった後、「能見松平」が入って参ります。この当時、江戸では「冬の陣」も終り、新たな経済状態を構築しなければならなくなり、参勤交代が始まり、全ての国道が、「街道」として整備されるようになりました。その時に街道が整備されることにより、街としていかに機能させるかと考えたのが「能見松平」のようです。「能見松平」は十日町に商店街をつくり、温泉を引いて、初めて 1625 年に「下湯」をつくったのです。これは大変大きな意味があり、それまでに武家が独占していた温泉を上山市中に流したということです。それで当時の町民が温泉を使えるようになったということです。それが上山の経済の一つの発展につながります。その後、「沢庵和尚」が流されてきて、「沢庵」も下湯に浸かったと記録が残っておりますが、それが一つの形として残り始めました。その後 1635 年ごろ「八幡屋」(やはたや)さん、市役所にいた羽島さんの家のところが上山で最初の湯をもらった旅館があったところです。その今の子孫は、新湯にあります「はちまんどろ」という歯医者さんです。その後「アイゼン」さん、元の「米屋」さんです。その後「中村屋」さん、「かめや」さん、今名前を聞いても分からないようになってしまいましたが、その後どんどん温泉宿が建ちました。1692 年に、「土岐山守」(ときやましろのかみ)が上山を出るころには、その当時、街道筋に温泉がありましたので、市中警備のためには街の中に街道があるというのは非常に思わしくないので、湯町から街道をぬけて山形に行った道、新町から十日町に入る道を変えて、湯町を召し上げたということです。湯町の温泉はお城の中にとりこまれたということです。結局その後明治時代まで湯町の発展はありません。その後どんどん十日町が発展していきます。なぜか。参勤交代もありましたが、出羽三山参りです。1730 年から 1750 年ごろにかけて、出羽三山参りがものすごく流行りまして、上山にそのころ旅館が 20 軒から 40 軒あったのではないかとされていますが、そのころの宿賃を調べますと、80 文から 400 文。そのころの一文はだいたい今の 100 円です。ですから、安い宿 8000 円。高い宿 40000 円。今とだいたいそんなに変わらないという、不思議な現象です。6 月から 8 月半ばぐらいまで、非常に出羽三山参り流行りまして、そのこ

ろ一軒の旅館の定員が平均 50 人から 100 人までだったといわれていますので、あったとしても一日 20 軒として 100 人。出羽三山行者詣ですと、だいたい 6、7、8 月半ばまでにだいたい 10000 人から 15000 人上山に泊まっているんです。その間はほとんど旅館が満館ということですから、上山の今の十日町を見ていただくと分かりますが、蔵が多くて、ものすごく立派なお家が多いです。当時の儲けがあったという結果だと思っています。

明治維新ごろになると、湯女（ゆな）が 60 人から 100 人がいたので、かみのやま温泉は「精進落とし」で栄えたんですね。精進落としで栄えたということは、女がいれば酒があるということで、12 軒ぐらいの造り酒屋があったといわれます。維新になると、明治政府に変わって、十日町には郡役所や警察ができたり、あの下湯から上は全部家中屋敷で、誰も入れないというところだったというところもあったために、十日町には混在した店があったわけです。商店もあれば女郎屋もあれば旅館もあれば造り酒屋もあるという一帯渾然とした街だった。明治時代が変わってきます。街道が米沢街道につながり、汽車が通ってきました。どんどん変わって、十日町から湯町へ温泉街が移りました。なぜかという、家中屋敷で温泉宿をやっていたので、もう一回温泉宿をやりたいということになり、十日町の雑多なところよりは、湯町の静かなところにいこうと。するとそちらにお客さんが流れていくようになります。当時画期的な事があり、混浴禁止になります。

今までは一軒の旅館の中に一坪の湯があれば両方で（男女）使えたのが、「伍助」さんは二つ持ってました。他の旅館にも貸していた。今度は一坪しかなくて貸せなくなった。明治 35 年にある旅館が湯町にもう一つ温泉を掘ったら、湯町の温泉が出なくなり、裁判沙汰になってしまいました。そのことがあり温泉を誰でも掘っていいことになりました。そして新湯にも「村尾」さん、「有馬館」さん、「月岡」さん……等ができました。そうしますと環境のいい大型旅館がどんどんできました。そして湯町の方から新湯の方に勢いが移りました。そういう状況を見ていたのが、葉山、高松の人達です。高松の「三木屋」さんはこれを見て、昭和 9 年に温泉を掘りました。また、葉山が昭和 23 年に温泉を出しました。温泉が一分間に 3000 でまして、そして温泉競争になってしまったんです。かみのやま温泉というのは湯町から始まり、十日町、新湯、高松、葉山と移っていたんです。そうやって移っていきやっとな昭和 52 年に温泉利用協同組合ができ、皆で温泉掘ってたら大変ということになりまして、お湯の安定供給をしてきたということです。それに基づいて 4 年前に上山温泉、葉山温泉とうたっていた 2 つの温泉組合が一つになりました。それで来年が 555 年になるという歴史です。それで初めて両組合が一体になってやるお祭りといいますか温泉行事なります。これから温泉と食を使った、食べ物とかワインでお祭りをやりたいと思っています。

【村松 氏】 ありがとうございます。いよいよ来年かみのやま温泉は開湯 555 年ということになっています。蔵王温泉では 2 年前に開湯 1900 年祭で、これは根拠のない話で強引にもっていき、ずいぶんいろんな行事をやりました。かみのや

ま温泉の発展過程をお話いただきましたが、大変貴重なお話をありがとうございました。最後に、高瀬先生にお二人のお話を聞きながらオールラウンドに街道の発達史などをお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。



高瀬 陽吉 氏

上山城の街とそこを通っている羽州街道、これがいつごろできたのかということ、少しさかのぼってお話したいと思います。いろいろな文献をひもといてもこれだというのはほとんどありません。

上山城（月岡城）がここに移築される前は、ここから西方にある高楯城というのがあったんです。この城は宝永年間に建てられたといわれていまして、それもはっきりしていないんですけど、日本が騒乱の時代でした。この高楯城は山城でした。山城は山を全部裸にしますので防衛的には強い城ですが攻撃的には弱いという特徴があります。家臣は少し離れたところにおいて、いざというときに集まってくるというところを今度は、近くに家臣がいるようにしたいという気運が高まってきます。天文年間ごろは、山城から里前におりてくるという傾向が全国的に広まってきました。それで天文 4 年に月岡ホテルさんの裏の昔「天神の森」というところだったんですが、ここに築城されたということになります。羽州街道が通っている十日町のメインストリートですが、あそこは川筋だったんです。前川という川筋でした。そして、この月岡ホテルさんの西側に「大沼」という沼がありました。そして村尾さんには「牛沼」という沼がありました。これらを自然の要害として「天神の森」に築城したということになっています。宝永年間には 1394 年から 1427 年ですけれども、温泉は 1456 年に発見されています。このころの高楯城時代の往還はちょうど下ですけれども、明日そこを散歩しますが、高楯城の麓を通っている古道があります。南の方に、奥羽本線の西側をって、山形市内に入っている街道です。移築され月岡城になってから、軽井沢というところから八幡町のところまで、武家屋敷の裏通りになりますけれども、八幡町をって途中に「千本橋」というのがありますけれども、そこから南下して、沢庵禅師の「春雨庵」をって行ったということになるわけです。そして、上山と伊達家の関係は、身内同士の激しい戦いとなって長く続いたわけです。天正 2 年の 1476 年に伊達家の攻撃にあって、非常に打撃を請けまして、(市内) 仙石や糸目、春雨庵の近くの高松、長清水、そして松山、この辺が焼打ちにあっております。このころはほとんど鉄砲で戦っていました。最上家の支配下だった上山でしたが、1622 年藩主に能見松平が入ってきました。前川筋の移動、銅町の開発になりますと、前川の移動では、天文 4 年に上山の天神森に城を移してから、はたして、伊達家から責められているのに、あえて前川をつぶして城下町にして、川筋を移すのだろうかという懸念もあります。城を移築してすぐには街づくりはしていないと思います。もうひとつは、山形城が 1622 年に廃止されるとき、幕府は羽州街道をって山形に入ってきているわけです。そして、宿駅制度ができてからすぐ道路の建設が始まったことを考えれば、上山の街づくりは、慶長合戦が終わって、ある程度落ち着いて、

慶長 8 年ごろから工事、町割りが始まったのかなと思われます。駅制度が始まって、大街道が幅六間、小街道（羽州街道）脇街道が三間となりますので、そういうことを考えてもこの町は慶長合戦が終わって、ある程度街づくりを見たあとに、最上義光がいなくなったんです。推測の域を越えませんが、こういう見方ができるのではないかと思います。明日もご案内しますが、高楯城跡周辺には大きなカラブリもありますし、そこに熊野神社がありますが、その周辺に廓があったのではないかという研究者もおられます。あの山の上が城だったというわけではなくて、もともとの市の中心であったという春雨庵のあたりまで城が及んでいたのではないかなと感じています。

【村松 氏】 どうもありがとうございました。上山の街の発達史、それと関連する街道がいつごろ出来上がったのかといった話をしていただいたわけですが、3 人の先生方のお話を聞いていますと、温泉の発達史と街道、それから上山の城下町が出来上がる中での街道、それから街道そのもの仕組みということで、総合しますと、なんとなく羽州街道が浮き彫りになってきたのではないかと思います。これからもう少しお話いただきたいと思います。斎藤先生どうぞ。

【齋藤 氏】 羽州街道、街道で忘れてならないのは、物資の輸送です。羽州街道の場合は奥州街道と同じように、25 人 25 馬というのが原則であったと。この「助郷制度」はいつごろからでてきたのか。資料がないのですが、寛政年間ではないのかなと思っています。檜下宿駅が 17 ヶ村、上山宿駅が 16 ヶ村という助郷村があった。上山は全部で 37 村あった。檜下と二日町、十日町それから中山、この四つが宿駅として抜けるわけですから、残ったところで 33。だんだんと馬を飼わなくなった、助郷で宿駅の運営が大変だったという、特に幕末ですが。ここで是非言っておきたいことは、旅籠に関係ありますが、飯盛女を代金のかてにおかれたことではないかなと。上山で飯盛女が公認されたのが、天文 2 年です。その時に十日町の 33 人の旅籠が連名で願いを出している。年間 30 貫文の運上費。飯盛女一人について、年間 3 貫文のミョウガ銭を出して許されていました。ところが、享和元年、松平信實の時代、いわゆる売春禁止法ですね今で言えば。風俗の取り締まりが目的で禁止され、旅籠が衰退してしまう。なんとかして飯盛女を呼び戻したいと。飯盛女はいろんな呼び方があり、「湯女（ゆな）」とか「飯売女」「宿場女郎」「酌とり女」等。その時に助郷村といっしょになって利用したと。つまり、馬がどんどんなくなって、馬を積み立てるものがなくなったから、飯盛女を一人かかえると、馬一匹宿屋で飼いますよということなんです。文化年間に 20 軒の助郷の宿村が連名して、藩に出したんです。そうしたら、喉から手が出そうな馬です。これだったらいいということになったんです。一人について 3 馬銭

を出すということになってたんですが、一人じゃたりないから二人女がほしいということになってきます。そうすると旅館は女を置くために馬を買わなければならないことになり、買うことが大変だと、悪いけれども代金にしてくれとなりました。文化5年(1808)松平信行公のときに、飯盛女が復活するんです。その時の条件は、領内の湯治客に酒の相手をさせません、それから、飯盛女一人につき馬一匹を飼育します、ということだったんですけども、結局、文政11年(1818)ですが、毎年擁護銭6貫文と櫓下の助郷にやる馬代金として21両、これを代用になったんです。それが飯盛女と馬代金が同じということになっています。そんなことで東北3湯郷、湯の浜と上山と合津の東山が非常に賑わったとといいます。

【村松 氏】 どうもありがとうございます。つづいて富士さんお願いします。

【富士 氏】 私が言いたいのは、555年になるというかみのやま温泉に考えていただきたいのは、もし温泉がなかったらこの町はあったのだろうか。温泉がなかったらこの町はなかったと考えた方がいいと思います。ですから、市民が温泉はみんなのものだという意識がない限りこの町は発展していかないと思います。中心市街地活性化計画が11月に認可されると聞いています。来年はこれからのかみのやま温泉の街づくり初年度になると思います。歴史を勉強してみると、十日町の発展は温泉そして湯女、そして酒です。造り酒屋が22軒もあったはずなのに、市内には12軒ほどあったようです。明治になってから経済状態が変わっただけで、一気に変わっていくという現実なんです。鉄道が1901年に通って、羽州街道の様相が変わり、街の中身が、十日町から湯町に移る。来年ここも、新幹線が通ってからもう20年を過ぎ、今度は高速道路が入ってきます。こういう歴史的事実をきちっと見ると、今後私たちはどうしていかなければならないのかというのが見えるような気がしますので、私ども温泉旅館は、48軒が21軒になってしまいました。750000の宿泊客が250000人になってしまいました。ほんとうに上山の危機だと思っています。これからの温泉地の発展をどうするか。温泉を私たちが共有しているんだという意識を持って、どうぞ市民の皆様は温泉を使っていただきたい。もっと市民の皆様方に使っていただけるような考え方とシステムを作っていきたいと思っています。

【村松 氏】 どうもありがとうございます。では最後に高瀬先生お願いします。

【高瀬 氏】 天神の森に上山城を築城してから、土岐時代にこの城下町の南の方の街道に、枡形の道があるんです。非常に珍しいのでこの辺を調査しているんですが、道

筋が分かりづらくなっているんです。城下町の外に桁形の道がるのは非常に珍しいんです。城郭の外に桁形をつくったり、お城の中に入って桁形を造るのが基本なんです、上山の中で桁形があったのが4か所なんです。絵図でみると南の方にも一つあると。ほとんど北の方にあつて、そこは伊達の攻めを防ぐという事もあると思います。道中、本街道が6間、小街道が3間、これが全部同じ幅であつたわけではないわけで。寛政元年(1780)に、2間以外ではすれ違いができないだろうという幕府からの通達があるんです。その当時の有効路面は2間そこそこが大半であつたという帳簿があるんですね。ただし街中とか一里塚とかは9尺にしとくわけですけども、街中は6間とか3間あるんですけども、それ以外は2間そこそこでも充分だということで、羽州街道もそういうところが大半だつたということです。上山市内に「カミン」というところがありますが、その前は4間あります。(7.2m) 二日町の昔の街道に近いところがあるんですが、4尺3寸ということで少し広がっているんです。それから、上山の発展で言いますと、三つの要因があつたと思います。一つは温泉の発見、二つは能見松平公以降に城下町を通らないように道筋を変えたこと、湯町から下大湯に湯を引いた、三つ目は湯町にあつた百姓家周辺ふくめ全体を強制的に家中にした、この三つが上山を発展させた最大の要因だと思います。下町に大きな旅籠の街を造り上げたということではなかろうかと思います。明治まではそうであつたろうと思っています。

【村松 氏】 どうもありがとうございます。斎藤先生は飯盛女について。富士さんから開湯555年祭についてのお話、それからぜひ市民の皆さんにそれを意識して温泉を利用して盛り上げていただきたいということ。高瀬先生からは街道の規格や上山の発展した要因ですね、いろいろと話をいただきました。ありがとうございました。